

ドレッサージュホースに育てよう!

ピルーエット パートⅣ

ピルーエットに関する記事は、今回で4回目になります。この運動は、MクラスからFEIセントジョージクラスにアップするために避けては通れません。しかし、歯車が一つ狂っただけで、この運動は確立せず、すぐに崩れてしまいます。失敗するには必ず原因があります。親交のあった故八木三枝子選手には、「私の中には、“馬の失敗”というものはありません、全ては人間の責任です」という信念がありました。私もトレーニングや競技で失敗を繰り返す度に、「何が足りなくて失敗したのか? 何をどう補うべきなのか?」と、人間がすべきことを具体的に探るようになっています。

ピルーエットに求められる条件をシンプルにまとめて理想の形にするために、一つ一つ必要なパズルのピースを当てはめて何が欠けているかを把握し、それを補うことができれば、人馬が織りなす美しい形と自然なリズムが生まれます。

いよいよ今回の記事では、ファイナルステップをまとめ、競技会で実施する際のイメージを構築していきたいと思います。

4. ファイナルステップ ワーキングピルーエットからピルーエットへ

ワーキングピルーエット(WP)は、競技会で行われるピルーエットの礎となります。トレーニングのほとんどをWPに費やした後に、さらに内方後肢を軸として前肢を旋回させるピルーエットを行います。問題は、どのようにWPからピルーエットに移行するかで、今回はそれを考えます。

下記の条件を用意しながらWPから競技会で求められているピルーエットを実施します。

- | | |
|---|---|
| ① 直線上で馬体を真っすぐにする(ショルダーフォア) | ⑤ 外方(手綱・脚)で旋回、内方(騎座・脚)で小さい前進を繰り返す(横→前→横→) |
| ② 歩幅を縮めながら頭頸を低く保つ(内方姿勢) | ⑥ 前半小さく、後半大きく!のイメージを持つ |
| ③ 3歩ほど歩幅を詰めたら、外方脚と外方手綱で前軀を旋回させる | ⑦ 入ったラインに戻り、真っすぐ出ていく |
| ④ 騎手は内方の蹬を踏むように体重を乗せつつ、馬の内方後軀に乗るイメージを持つ | |

[右ページの写真参照]

これらの手順は、基本的にフルピルーエットを想定して書いています。当然ながらハーフピルーエットも全く同じです。

これまで時間をかけてきたWPで確立した人馬の関係があれば、ここで必要なのは本番のピルーエットでの微調整です。ピルーエットは、どんなに素晴らしい馬でも必ずと言っていいほど左右違います。これは、踏歩変換もハーフパスも同じです。騎手がいかに馬の左右の癖を把握し、馬の不得意なところを事前に準備シカバーするかで成功するかどうかが決まります。

ピルーエットでの失敗例と対処法

◆ 後肢だけを勝手に左右に変換してしまう

この問題は、オースミイレブンに収縮駢歩を教え始めた頃に出たものです。特に右手前では必ずと言っていいほど、または歩幅を詰める素振りだけでもなっていました。正直に言うと、その頃は「サラブレッドにはやっぱり無理なのかな〜?」という葛藤が毎回生まれていました。全くうまくいかないままトレーニングを終えることすらありました。ただ、諦めたら終わりど分かっていた。「馬の未来は、乗り手によって決まる」。これは自分の信念として常に持っていることです。その馬のベストを導き出すことが、我々の使命です。馬に寄り添いながら、一つ一つ納得させてステップアップしていきたいものです。

話がそれましたが、なぜ後肢を左右バタバタと入れ替えてしまうのか?という原点から考え直しました。理由は、歩幅を詰めようと手綱で扶助を出したときに馬が苦しく感じるからです。駢歩を詰める際に拳を強く使えば、馬は前に行けなくなって前進していた後肢が前に運びづらくなり、それを逃がすように左右に後肢を変換してしまうのです。では、どうすれば良いのでしょうか。私は一時的に以下の手順を試しました。

- ・手綱操作よりも騎座扶助を強く使って馬を詰める
- ・極端に歩幅を詰めるのではなく、後肢を変換しない程度に抑える
- ・手綱操作が弱くなれば馬の頭頸は上がりやすくなるが、後肢が変換しないことを優先する

これらを行いながら、まずは馬が正しく後肢を動かしながら歩幅を詰めることを優先して身体に染み込ませました。非常に地



味な作業ですが、一度頭がホットになり逃げ方を覚えてしまったサラブレッドには、このような地道な方法が必ず必要になります。これだけで約3カ月は費やしたでしょう。その後は積み上げたブロックを崩さないように繊細に、でも攻められるところを探しながら要求していきます。

今では、どんなに詰めても、強い手綱操作をしても、後肢を左右に入れ替えることはありません。

◆ 旋回が速くなりすぎる（歩数が少なくなる）

この問題は、ピルーエットに入ろうと旋回を始めた途端に、くるりと勝手に回ってしまい、騎手のコントロールから外れてしまう事例です。これは、馬が騎手の求めていることに精一杯応えようとしている証拠です。まず我々が、なぜこのようなことになるのかを考えなくては解決しません。常に馬の気持ちにならなければ、解決の糸口が見つけれられません。人間のさせたいことを無理やりさせようとしても馬には通じません。馬が自然に納得してできる環境を人間が作る必要があります。

この症状が出る場合は、以下を確認します。

- ・収縮歩をさらに詰めた結果、ステップが短くなっていないか
- ・内方姿勢を維持しているか（反対姿勢になっていないか）
- ・旋回と旋回のステップの間に“僅かな前進”が組み込まれているか
- ・外方からの扶助が強くなっていないか

問題を解決するには、これらの問題点を一つずつチェックして改善することが必要です。自分に足りない認識と扶助を見直し、時間をかけて馬と向き合えば、成功する確率が必ず大きくなります。

ピルーエットは、人と馬にとって難しい運動です。サラブレッドという収縮には向かない馬でも、段階を踏んで納得させながら行えば、その馬なりにできるようになります。人間が常に“何が足りないのか”を感じて補っていかなければなりません。そのため我々の頭の中には「ピルーエットに必要な扶助の条件と、馬の体勢が崩れそうになる前にどう対処するか」という想定をしておくべきです。これまでに書いてきたことだけでは伝えきれない感覚がたくさんあります。また機会を見つけて紹介します。

今回は、馬場馬術の最高峰であるグランプリ課目にある、ピアッフエとパッサージュの運動についてまとめていきたいと思っています！



① ショルダーフォアで馬体を真っすぐに



② 頭頸を低く保ちながら内方姿勢をとる



③ 外方から推進を送り旋回に入る



④ 常に内方鏡を踏むように意識し騎手の軸を作る



⑤ 旋回させながらも小さく前進（内方騎座と脚で）



⑥ 旋回(外方)→前進(内方)→旋回(外方)→前進(内方)→